

なひ

9月号

vol. 163



特集／



9月入学編

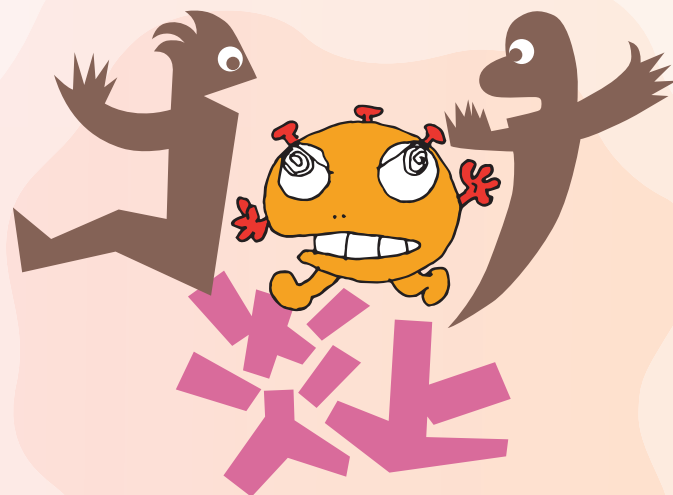
9月入学編



コロナ禍で沸き起こった 9月入学

決断こそが政治家の役割と自任する総理大臣が突然、記者会見を開き、学校の3月からの休校を決めた。その後、緊急事態宣言が発令され大阪府では5月末まで学校の休校が続いた。これにより失われた「学び」の保障という宿題を課せられ、誰もが答えを持ち合わせてなかったところ、ある高校生の「つばやき」がにわかに注目を集めた。それが「9月入学」の導入だった。

大阪府知事も強力な推進派となつて、9月入学制の導入を「起死回生策」と位置づけ、「この機会を逃すと二度とできない」とメディアで喧伝し、5月中旬には総理大臣も「有力な選択肢



未曾有の炎上だった。大阪の街が止まった。マスクが売れた。テレワークを始めた。突然の長い春休み——。みなさんはいかがお過ごしだったろう。わたしたち、にしなり隣保館も感染拡大の予防に配慮しつつ、地域に寄り添ってきたつもりだ。その現場で見えてきたいまを振り返っておきたい。コロナ禍以後、どうすれば私たちは再び出会うことができるのか。そのための備忘録として。

の「つだ」と発言。なんとなく導入賛成が反対

を上回り9月入学が現実味を帯びていた。ところが、市町村自治体や高校・大学の現場から反対の声が相次ぎ、6月上旬には風船がしぼむように9月入学の話は立ち消えた。

— いったい、なんだったのか？ そんなモヤモヤを打ち消すために、5月下旬に「9月入学本当に今ですか？」(※)というプロジェクトで教職員アンケート(1300人弱が回答)を実施した、教育ファシリテータの武田緑さん(Demo代表)にインタビューした。

5兆円をかけて今やること？

— 「9月入学」と聞いてどう思われましたか？

武田 私自身、休校中に広がった教育格差を是正するには「全員で1年留年するものもありじゃない？」と素朴に思っていました。ただ、オックスフォード大学教授の刈谷剛彦さんが、冷静に待機児童(保育所・学童保育)・教員不足・移行コストを分析・試算してくれた報告をみて、考えを改めました。提示された3つのシナリオはいずれも、何十万人もの待機児童の発生、数万人の大幅な教員不足、学年の区切りの変更(今

の同学年が分断される)など、かなり大規模な混乱を生み出すとしています。待機児童解消や教員不足を補うための予算は、小学校段階だけ見ても、毎年3215億円の追加支出、当該学年が在学している6年間・毎年2050億円かかる試算でした。文科省の試算でも9月入学を導入した場合の追加的な家計負担は3・9兆円、4月から働く予定だった新卒者が失う所得は7000億円、それに伴う税収減は1000億円弱。「全部、足したら5兆円になるやん」と驚きました。

— だけど、それで念願のグローバルスタンダードになるんですね？

武田 「9月入学本当に今ですか？」と一緒に取り組んだ松田悠介さん(Crimson Global Academy 日本法人代表取締役)の結論は「入学時期の変更よりもやるべきことがある」です。簡単に言くと、日本の学生が留学できない理由は「費用」が7割で「語学不足」が4割。「入学時期」は大きな要因ではない。また、海外からの留学生を増やしたいのなら「教育の質」を高めることに注力すべきということでした。

今の国の教育関連予算がだいたい年間5兆円です。「大鉈を振るう」に等しい9月入学改革ですが、そのわりに得られるメリットは不明瞭です。それより少人数学級の導入や教員の加配などできることはいっぱいあります。グローバルスタンダード云々は今回のコロナの状況とは無関係です。

— 9月入学の議論はどうなりましたか？

武田 官邸主導の「教育再生実行会議」では継続審議扱いですが、トーンダウンしましたね。トップダウンで降りてくる指示に現場や関係者が冷静な判断を促した結果でしょう。教職員アンケートでは「導入反対」53%、「賛成」24%、「どちらともいえない」22%でしたが、入学時期の変更よりも、「コロナ後の「新しい学校生活様式の構築」や「学びの遅れの取り戻し」に注力したい」という声が多かったです。

デジタルとアナログ

— 学びの遅れ解消にICT活用が注目される一方で、各家庭の通信状況の確保などの課題も耳にします。



武田 オンラインを活用した

安否確認や学習サポートは、公立でも熊本市や広島県など一部の自治体が一歩的に取り組んでました。文科省はGIGAスクール構想を5か年で計画し、2018年度から教育のICT化に向けた環境整備を進めていました。1人1台のPCや高速通信ネット環境を整備して、個別最適化された学びを提供しようとしていました。それが、コロナ禍以降急ピッチで進められようとしています。

— 構想はすでに3年目、それならそこで整備されてそうですね。

武田 国と自治体で半分ずつという予算立てになっていたので、自治体によってばらつきがあります。すべての子どもや学校が整備されている状況では全くありません。また、現在学校に配備されているインフラはとても脆弱です。がんじがらめのセキュリティで、YOUTUBEもGmailも使えないところも多いです。

【#9月入学本当に今ですか？】 記者会見資料



が必要ですか？

武田 デジタルの利点は、一人ひとりのペースや習熟度や興味関心などに合った学びができること、つまり「個別最適化」ができることです。こちらが向いているのではないのでしょうか。それと、採点の自動化やアンケートの回収からエクセル表を自動作成するなどの「効率化」です。一方で、実際に集まって一緒に過ごすことには、デジタルには代えがたい側面も当然あります。遠隔でも話し合ったりはできますが、やっぱりエネルギーの交換、みたいなものはZOOMで喋っても起こりづらいなと感じます。協働的な学びはできるだけ対面でしたいですね。

から。それに、学校現場にはデジタルへの根強い抵抗感もあります。そういう意味では、何をデジタルで、何をアナログですべきかの腑分けも重要だと思います。

— 教育現場で、デジタルとアナログを仕分けるとしたら何

— 若い先生も増えたので、どんどん使っちゃっていいんじゃないですか(笑)。ちなみに、児童虐待に取り組むヨーロッパのアンファン・ブルーという団体では、大人気のオンラインゲーム「フォートナイト」のなかで若者からの相談を受けられる仕組みを作っています。デジタルはただのツールなので、変に構えずにフラットに選択肢として使っていけばいいと思います。

いすれにしても、私が一番大事だと思うのは、そういうことを、教職員同士が本音で話し合うことです。「学校はどんな機能を担う場所なのか」「子どもたちにどんな経験や機会を提供したいのか」「そのためにどんな方法を組み合わせるのがベストなのか」を、みんなであれこれだ議論して、着地点を探すべきではないでしょうか。

— 若い先生も増えたので、

武田 先生達が自分のクラスや授業で個々に使うことは、もちろん今もありますし、今後も増えていくでしょう。ただ、今回の休校中のICT活用は、学校や教育委員会レベルでの組織的な意思決定が必要な案件でした。学校は普段から常にクレームとバッシングのリスクに晒されています。また、前例踏襲というか、新しいことがしにくい組織文化もあることが多いです。なので、テクノロジーを使いこなし、それを他の同僚と共有できる先生が組織内にいたとしても、組織的な意思決定としては「挑戦」よりは「守り」が優先されることが多かったと

感じています。

本来、大事なのは「子どもや家庭を支えるために必要なことをやる」ということで、方法はデジタルでもアナログでもいい。ただ、今回はアナログの手段がほぼ封じられたので、電話だけではできないデジタルによる安否確認や心のケア、課題のやりとりをもっと洗練させるチャンスでした。でも、現場の先生がそれをしたいと提案しても、いろんなレベルでストップがかかってできないというケースをたくさん聞きました。そのことは、悔しく感じていました。

デジタルとアナログの共存をつくる社会へ

— デジタルとアナログが共存する教育現場が必要になりますね。

武田 これまでは「もめごとが起こるから」ということで学校現場も教育委員会も子どもたちのスマホ所持や活用、ましてや授業で使う、などにはかなり抑制的だったと思います。個人的には、今後は「テクノロジーを使うことは当たり前」という大前提のもとで、それらを使う際に自分自身が引き起こしている・巻

き込まれうる問題を理解し、責任を持つてかつポジティブに活用するための教育(デジタルシチズンシップ教育が必要だ)と思います。「どうリスクヘッジをするか」「加害者にならないために気をつけるべきことは何か」「はもちろん、どのように活用したら、より豊かに社会とつながり、自分の可能性を広げられるか」を子どもたち自身が考えて、使いこなしていく。そのための学びの機会をつくるのが大切です。

— デジタルが心地よすぎて、アナログを求めない子どもが増えそうだと不安です。

武田 実際に身体を使って実物に触れて経験を豊かにする機会があるかもしれません。ただ、そうした原体験さえあれば、「ネットだけの世界に閉じこもるんじゃないか?」という心配はしなくていいと思う。会いたい人がいれば、やっぱり直接会いたいし、Google Mapで世界中を見られたって、やっぱり直接見



教育現場の混乱は、子どもたちの混乱につながってしまふ。9月入学はもう少し慎重に議論すべきだろう。それよりも、現場の先生たち同士で、勤務する学校で出来ることや必要なこと、子どもたちにとって大切なことを話し合い、リスクを恐れず実践できる環境が求められている。それは、教育現場からの「ボトムアップ」を築いていくということでもある。私たちの地域でも教育の「デジタル」と「アナログ」について、先生同士で話し合い、実践していく機会をつくってほしい。

文責：西田吉志・田岡秀朋



1970年代という時間は、私にとって記号的、暗示的意味のある特別な歴史だったと記憶する。みずからの無知を知らされ、社会への関心を強いられ、なによりもみずからに微塵の力もないことを知らされた“時たち”の連続であったからだ。70年代という時が変幻し、遥かな遠い現在のこの地に漂着してしまった今、ごく私的なその記憶の断片をかき集め、私がいた70年代を確認してみたいと考えた。

くらし応援室／楽塾：佐々木敏明

1970年 三島事件 3

ROLLING '70 vol.4

多彩なタマネギの皮

「むいてもむいても同じ私」(『なび』7月号)とは、変わらぬ自分への焦燥であり、変わらぬ社会への怒りや絶望が深層心理を支配し、悪意の少数派者でいようとする主人公は『金閣寺』(56年)の青年僧である。この世の出来上がった価値の否定、拒否、そして孤高の自分の存在を明確にすることで、社会や世間の通俗性や道徳的価値を踏みしめる。

三島は変わりえないタマネギの皮に憎しみと憎悪を宿し、その代わりその皮一枚一枚に異なる色を着彩していった。三島の著作であるタマネギの皮には、ふたつとない極彩色が塗布されている。自分ではない仮面に覆われたもう一つの自分、あるいはもつと多様な自分を表明すること、そしてそれが彼の本来の表現であり、タマネギは三島の怒りのメタファーだった。

三島の仮面の演技は自己欺瞞が本質で、また自己否定する三島の作品は、だから全て嘘であって真実である。三島は常に歌舞伎役者のように大見得を切り、他者の価値ではなくいつも自己変革の主張を続けようとした。

自己変革

この時代、私も含む若い世代や学生たちは「自己解体」「自己変革」なるスローガンを呼び、自己陶醉自己満足していた。同じ仲間的主張には「異議なし！」を連発し、異見には激しい「ナンセンス！」「帰れ！」「コールを浴びせかける。自己解体や自己変革は他者への誹謗や中傷に向かい、ついに自らの解放には向かわなかった。左翼、右翼という垣根づくりには奔走したが、自己解体し解放する「個人的体験」を体験せず言質や理屈のみに埋もれてしまった。

三島の作品に自己解体や自己変革など俗な言葉を見ることはもち

と脅威を感じる。

第五章。柏木は、人間が考える美の実相は無機能的であり、有機的関心は政治のみで、人間は自己冒瀌な生き物という、そんな悪徳をエネルギーマンに変える柏木に畏敬を見る。そして、性的欲望があらわれるとき、主人公にとって絶対的永遠の金閣が立ちふさがり不能にさせる。そして、暗い感情をひととき明るい感情に導いてくれた鶴川の死を知らされ、再び闇の感情を共有する柏木にひかれていく。

第六章。鶴川の死に主人公は喪服する。そして健康と不具が同格だとする柏木に接近する。そして再び金閣寺が現れ性的不能にさせ、人生から隔てようとする金閣に呼びかける。「いつかきつとお前を支配してやる。(中略)いつかは必ずお前をわがものにしてやるぞ」と。紙数が尽きた。続きは11月号にて。

見聞きデザイン・イラスト構成
「三島と仮面」/hidamiraki

『金閣寺』は全十章からなる。
第一章。日本海寒村の寺住職である父が、金閣寺の美を主人公に語り継いできたこと、愛されない

ろんない。しかし自らの卑小な存在や脆弱な肉体、希薄な精神性をあざ笑いながら、そこから退かない表現が、実は自己解体や自己解放だった。内なる仮面を着脱しながら、真実と虚実の間を往還し、常に演技する中で自己の変化に臨んだ。ときに矮小化された左翼右翼とかいう断絶をあざ笑い、自らを偽悪者にして左右の翼を跳ね返し、また世俗や小市民にも刃を振りかざし奮闘する仮面の演技者であり演出家であった。当時の私たち若者が、口先だけの旗印としていた自己変革や自己解体を彼は繰り返して実践した作家であった。

第二章。父親の計らいで金閣寺の徒弟となる。毎日金閣を目前に心象の金閣より本物の金閣の姿を見て、そしてなぜそれほどまでに美しいのかを金閣に問う。そして父の死と悲しみの感情とが、互いに結びつかないものとして描かれ、世間が当然と考える共感性を拒否する。そして京都空襲が現実的になり金閣をより悲劇的存在に昇華し、金閣を美化していく。戦火で滅ぶ自分と金閣が、同一の破滅を有する共感に酔うのだ。

第三章。主人公を虚無的に眺める鶴川の存在が描かれる。主人公が唯一慰められる存在だ。主人公は「私にとって、敗戦とは何であつたかを言っておかなくてはならない。それは解放ではなかった。(中略)不変のもの、日常のなかに融け込んでいる仏教的な時間の復活に他ならなかったと述懐する。世間の人間が、戦後の暮らしにうまく立ち回って悪を味わうなら、自分は内界の悪となって立ち向かうと決意するのだ。それは戦後社会への深い絶望感であり、大衆社会への怒りだ。そして主人公の決意は反俗、小市民へのアンチテーゼとなり、これは三島の諸作品にも濃厚に増殖している。

第四章。大学の同窓に柏木という障害を持つ男がいた。障害を核とし反逆や悪意、破滅を主張し、健康と障害の融和はないとする柏木に、主人公は感嘆



【佐々木敏明】鈍く映ゆ珊瑚もいちど彩もどせ
麻酔してしばし屍となる炎暑
これもまた夏断ちなるかな病後食
病室をときはなたれて蟬となる

【沖田一志】主にアウトドアで10年以上使っている七輪を買替えた。数年前から部品が壊れて火加減の調整が難しくなり、ひび割れから炎が漏れたりと限界を感じてました。愛着があったので残念。

【田岡秀朋】9月入学の取材でのひとコマ。「やっぱり桜の下で入学式がええなあ」「ネトウヨみたい」うーん。やっぱり桜は右的なのかなあ。

些事争論

些事でも何でも気になったらあれこれ考えてみよう。
いいこと思いつくかもしれないし。気づいたら西成に
たどり着いていた、或るオタクのゆったり系コラム。

『シカゴ育ち』

東京の都心に暮らしていた頃、夜になると部屋の窓から蛍の姿をよく見ていた。大抵は高層建築の屋上や電波塔に止まり、季節を問わず、夜空へ向けて赤い光を明滅させていた。航空障害灯。正式には、そのような名が付いているらしい。航空機に建築物の存在を知らせるため、夜を徹して合図を送り続ける灯の群れは、空が白み始める時間になると朝の中に溶けて行った。

『シカゴ育ち』を読んでいたら、その頃のことを懐かしく思い出された。物語の舞台になっている一九五〇年代のシカゴ市内は大規模な再開発の只中で、至る所が取り壊され、掘り返されていた。見慣れた街の風景は次々に崩れ落ちて行く。いかにも移民の街らしく、住人たちが方々からやって来ては一時そこを留まるが、やがては他所の街や国に去って行く。街という存在は、人も建物も休みなく移り変わる場所、いつでも旅の空の下にある場所として描かれている。

所収の短編「荒廃地域」でも、主人公の青年の住む一帯は再開発地域に指定され、近く解体されようとしている。他の短編にも、立ち退き後の空き地や廃墟となった家々、新しい高速道路の建設現場など、空白だらけの街の姿が



描き出される。過去と記憶が重機で壊されていく中で、若者たちは明日の见えない日々を、夜に護られながら向こう見ずに生きた。延々と続く工場や倉庫。落書きされた公営住宅群。煤けた街を車で疾走し、高架下の暗闇で音楽を奏する時、彼らは都市の片隅で束の間の光を放つ。

街の時間では、物語はいつも真夜中によって来る。長い街での暮らしの中で、そのことを学んだ。本を閉じて暗い部屋を抜け出し、寝静まって寂とした街路を歩くと、もうここにはいない者たち、どこか遠くの街へと去って行った者たちの残して行った物語や歌を聞くことができる。月が照らす舗道や、埋立地で回る観覧車、誰もいない地下道や、街路樹の下に濃い闇には必ず、誰かの人生の物語が落ちている。信号機の点滅も、自動販売機の鼓動も、大阪湾から上がってくる潮の匂い

スチュアート・ダイベック(柴田元幸訳)
『シカゴ育ち』白水リブックス、2003年

ハンブレイ・T

人が去り、時が流れても、歌は残る。暗闇の中で、街の光の中で、一筋の川のように、歌は流れ続ける。



【安田拓也】中島みゆきさんの音楽舞台「夜会」を、劇場版で初体験してきた。舞台の構成がシンプルゆえ、訴えかける声の豊かさ、少年・少女のような感性に魅せられた。どれも規格外。



【西田吉志】「鹿さんが見たい」と娘にせがまれ車で奈良公園を一周。運転に注意しながら窓越しに鹿を見た。本当は車を降りて、せんべいあげたかったね。そう公園には野生のキツネもいた。



夏休み前、子どもたちと近くの公園にセミやバッタ取りに出かけました。屋上では水遊びをして楽しく過ごしました☆今年の夏も素敵な思い出をいっぱいつくろうね！

Go Kids International School

6 3つうたまた 間

ソーシャル・ディスタンス

ハナレバナレになった人とまち。
くらしの窓から紡ぐヒントを探してみる。

個人的にはまだ半信半疑な「社会距離(※)」に絡めて、人と人の社会的関係性「距離感」の今後を考えてみる。あらゆるものの近さと遠さを同時に実現する通信技術の発展は、正にこの渦中に向けて着々と準備していたかのよう。等間隔で並んで座る川縁のカップルのごとく、元々みんな他人と一定の距離感を保って生活している。満員電車では、間隔もなにもないが、音楽・本・スマホ・友達との会話などで距離感を作るマナーを工夫してきた。一方、お祭りの良いところは人びとを雑多に集めたその賑わいにあった。通信技術のおかげで、距離を保ちながらある種の仕事や会話はできるようになったが、正直、飲み会やライブは「そっぴい」こつちやない」感が残る。

これからは「距離を取る」とは「遠ざける」に限定され、「近づける」はなくなっていくのだろうか。離れてこそ分かる何か大切なものに気付けば、それが新しい生活様式の基盤になるのかも知れない。来年の正月もまだ、皆で集まるのは難しいかもしれない。

(安田拓也)

※感染抑制を意図した物理的な距離



鴨川のあるひと時



【寺島史視】「自分で体験」「地域とのつながり」をモットーにNPOと共にやってきた子どもの居場所事業「やってみよう屋」も3年目。6月からは「やってみよう屋」を中学校内で開始。どんどん広がっていきう。



【谷口円】ずっと欲しかったインドの絵本「夜の木」を購入。うれしい！手書きの紙、手作業でのシルクスクリーン印刷、手製本という全てで作られたこの絵本。プリミティブで美しい一冊です。

葉っぱの吐見

とき

私は草木が大好きです。とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱとのお喋りを聞いてください。



「いちょうの葉っぱ」の巻

夏のわたしのからだはセミの合唱の舞台。今年もたくさんさんのセミ合唱隊の参加にビックリ。元気な歌声はアブラゼミ。寂しげな歌声はヒグラシ。鳥のような歌声はツクツクボウシ。

頑張るセミの合唱隊に、わたしは両手いっぱい広げて拍手する。コンサートが終わるころ、季節はもう秋。わたしのからだは、ちよっぴりくせのある銀なんの舞台に変身する。

赤井まゆみ

いちょうの事

中国原産の裸子植物。樹木の名としては他に「ギンキョウ」「ギンナン」や「ギンナンノキ」がある。花言葉は「長寿」「しとやか」「詩的な愛」。

い湯がげん

障がい者自死事件は残念だった

平野区の市営住宅で知的障がい者の成人が自死した。住宅自治会の当番制班長を自信がないと断った際、理由となった障がいの状況を書かされ閲覧されたことにショックを受け、苦悶し自死に至ったとのこと。遺族が住宅自治会等を相手取り2500万円の損害賠償を求めて提訴したことでニュースになった。「班長を務められない理由(障がい)を書かせ、閲覧する」こんな方法しかなかったのだろうか、ホントに残念でならない。

障害者差別解消法(2016年施行)は「不当な差別的取扱いの禁止」と「合理的配慮の提供」を定め、支援措置を規定している。法に照らせば、住民役員及び同席していたとされ

る社会福祉協議会の関係者の行為は「不当な差別的取扱い」にあたる。住宅自治会は任意団体であるとはいえ、このような抗争(コンフリクト)は想定されたものである以上、設置者の大阪市、平野区と、そこから管理を任せられている住宅管理事業者の「合理的配慮の不提供」も裁判で争われることになる。8月10日時点では、大阪市は沈黙し、取材も拒否しているが、これは良くない。大阪府は「障害を理由とする差別の解消の推進に関する条例(2018年施行)」で、こうした抗争を想定して「広域支援相談員」の配置を定めているが、話し合いに同席した関係者がそれにあたるのか定かでない。「どこ」の住宅自治会でも、いや町

会でも役員のなり手がなくて困っている。当番制班長まで自由意志だとなると、自治は成立しないではないか」という反論。住宅役員側への同情の声もあろうが、差別的取扱いの免罪にはならない。むしろ、コロナ禍でも指摘されている「同調圧力」も影響して、「社会全体が不寛容」になっているのではないかと反省されるべきだと思う。自死した障がい者は、頑なに班長就任を拒否したのではなく、行政や社会福祉にも相談し、助言を乞うていたように思われる。想像でしかないが、この種の抗争も伴う社会的体験は彼にとって未知のもので、そこでの取扱いが想像を超えた冷酷さだったのではなかったのか。

さて、にしなり隣保館(ゆくとあい)は、民設置民営だが、同和対策事業時代からの公営住宅自治運営を引き継ぐ数少ない「地域自治支援の非営利民間組織」だ。さっそく、寺本良弘館長は事件の調査に乗り出し、自らの組織の再検証も実施されておられた。障害者差別解消法や一連の法制度はどれほど深められてきたか? 住宅自治会運営の難しさにどれほど付き合ってきたか? 大阪府は来年度から住宅管理を民営化して、民間事業者に管理を委託することになるが、ただの効率化にならないか? 心配の種は尽きないことだろうか。

にしなり隣保館も交流する部落解放同盟大阪府連は、公営住宅の自治や管理に精通する稀有な団体だ。行政責任を免罪するわけではないが、公営住宅等での自治のあり方には非営利社会活動の役割が大きいと期待する。大阪府や大阪市が沈黙しているのは、まさかとは思いますが、コロナ対策や都構想の住民投票対策に忙しいからではあるまいか。そうであるなら、困ったことだと思う。



富田 一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「い湯がげん」のテーマ探しに出かけます。

最近の話題は「新型コロナ」ばかりだが仕方ないのかなとも思う。8月4日、吉村大阪府知事が記者会見で、うがい薬がコロナの病状を緩和するという旨を語った。しかし、感染者拡大のなか少しでも重症患者の発生を抑えたいという知事の思いとは裏腹に、お店からうがい薬がなくなり、ネットで途方もない価格で取り引きされるなど異常な事態が発生した。スーパーでもインスタントラーメンやパスタが品不足になった。

以前にも同じような光景を見た。その時はたしかトイレトペーパーの買い占めだった。どうしてこんなに、いとも容易くパニック状態に陥ってしまうのか。「新型コロナ禍のもとでの生活」を実現するにはもう少し冷静に行動しないと。買い占めや不当な利益のための転売は控えるべきだ。

(寺本良弘)

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちに皮算用していることを語っていくよ。



「若松司」あるとき「転石、苔を生ぜず」の意味を確認してみたら、英国と米国で意味がまったく反対になってて、びっくり。ところでThe Rolling Stones ってどこの国のバンドだっけ?



「山村裕太」パソコンが故障しました。画面の一部分だけ真っ白になる故障。Wordを使っていると、ちょうど文字サイズの変更部分が見えません。意外と不便でした。

地域の縁を心でつなぐ

松崎 心の時間

大島みち子さんの『若い日の日記』に「病院の外に健康な日を三日下さい」とあります。彼女は「二日目は家族と過ごし、二日目は彼氏と過ごし、最後の日は一人で思い出と過ごしたい」と記しましたが、願ひは叶うことなく二十一歳の若さで亡くなりました。この話は吉永小百合さん主演映画『愛と死をみつめて』で広く知られることになりました。私の父も「もう一度家に帰って時間を過ごしたい」と願ひながら叶わず、病院で亡くなったことを思い出します。旅行や高級レストランで費やす「時間」が特別な優れた「時間」ではなく、何気ない日常の中に、大切な「時間」が含まれていたのです。「タイムイズマネー」をもじって「タイムイズライフ」と言う人がいます。「時間」は自らの「いのち」を削って作られるので、この世で一番大切なものと言えましょう。年を重ねると、使える「時間」は次第に減ってきますが、使った「時間」は消えませんが、「思い出」という「時間」が心に貯まって行くのです。年を重ねることもありがたいことですね。

松向寺 通法

ココドコ

ココはドコ？
わたしはぐへレ？
編集部が厳選した
「にしなり100景」
大公開！

今回はサービス問題！西成にお住まいの方なら一度は見かけた事があるでしょう。通天閣ではないですよ。ココドコだかわかった人は、ゆ〜とあいの受付まで！正解者にはドリンク無料チケットをプレゼントいたします（先着10名様限り）。回答期限は9月末日、ふるってご回答ください！

【先月号の答え】 今宮駅前のコーナンの近く、北開1丁目でした！最近工事をしているようですが、無くなってしまうのでしょうか？



2015年11月撮影

ゆ〜とあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ〜とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび9月号(vol.163)

発行日：2020年9月1日(創刊日：2007年1月1日)

発行：株式会社ナイス

住所：大阪市西成区長橋3-6-33

電話：06-6563-1156

E-mail: info@nice.ne.jp

url: http://www.nice.ne.jp/

編集長：若松司

編集：沖田一志、佐々木敏明、岡田秀朋、寺島史規、西田吉志、安田拓也、山村裕太（あいうえお順）

イラスト：hidarimakい デザイン：谷口円

facebook: <https://www.facebook.com/navi.nishinari/>

facebook

